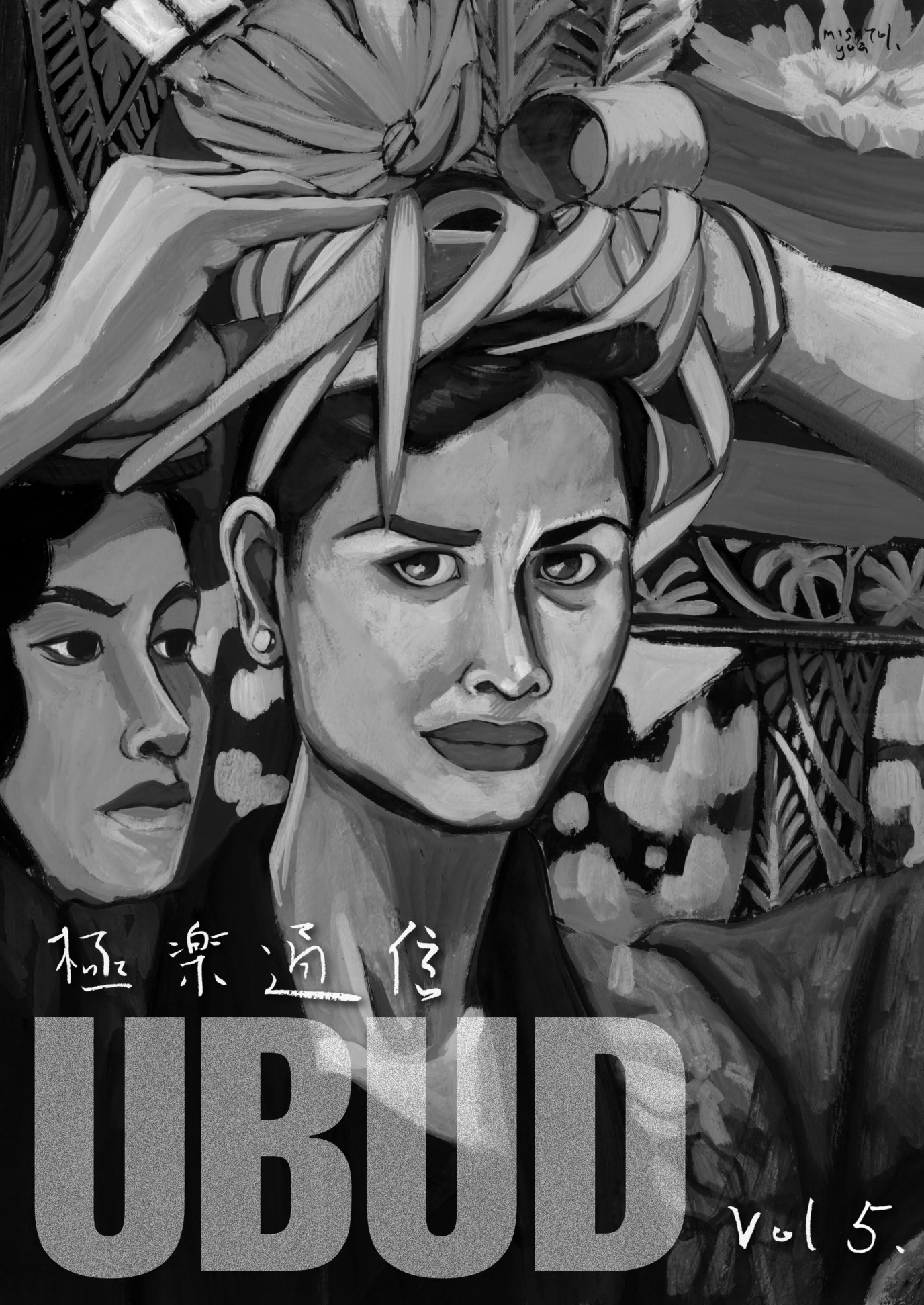


極楽通信 UBUD

Vol 5.

極楽通信
UBUD

U・B・U・D ◆ I・N・D・A・H

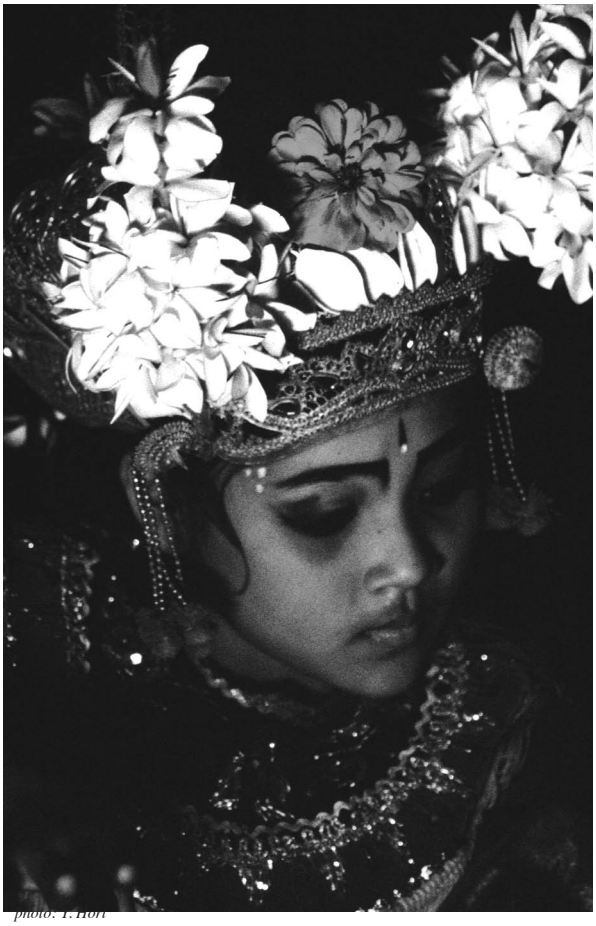


photo: T. Hori

やはりバリでもっとも華やかなのは踊りである。どの種類の踊りもバリで踊られるものは神様だけでなく人をも魅了する。踊り手は空気中から不思議なエネルギーを感じ取り、神から授かったものを捧げるために踊ると聞いた。厳しい練習と信仰心に支えられた賜物ともいえる踊りの姿は短時間でできるものではない。そこには禅僧やヨガ行者の悟る境地があるような気がする。何らかの力、フォース、プラナ、エネルギー、気、を感じ取り吸収しコントロールしながら心を無にして舞う踊り手は、芸術家を飛び越えて神の境地に近づいていることは確かである。

同じ場所でそれを見ることができれば、観客にも力が飛び火してくるように感じるのは私だけであろうか。

堀　祐一

Vol. 5 1994 Oktober

Contents

● Kabar Baru Berita Lama
ヌガラの夜 ---- 4
ODALAN (Pura Dalam Padangtegal) ---- 5
バリ人気質・1 ---- 6
● Belajar Tari&Gamelan -5-
たった6日の練習でしたが… ---- 7
●人物紹介
Dewa Putu Beratha ---- 8
● Tirta Arum
香り立つ水 ---- 10
● Pelajaran Bintang
バリ島・星空散歩道〔3〕 ---- 12
● UBUD よろず百科
学校／ Sekolah ---- 16
● Enak・Enak・Ubud おいしいものに目がない
さぁ！　今夜も Cari Lindung!! ---- 18
● C・O・L・U・M・N
ツーリスト・エイリアン ---- 20
● Tulisan Bersambung
Kamu harus mengerti dong! ---- 21
●バリの舞踏
Mekepung ---- 22
●バリの花
Jepun ---- 23
● Toko　BEST 店
Exotic Meidy ---- 24
● Warung　味な店
Yogyakarta Cafe ---- 24
● Pondok Manis　私の常宿
Dewi Sri ---- 25
● Pesan & Kesan　旅人一声 ---- 25
● Apa it? ---- 26
● Ubud の環境を考える ---- 26
●その他のニュース ---- 27
●ウブッな人々 ---- 29
● Studio　スタジオ ---- 30
● Pengumumaan　伝言板 ---- 30

ひょうしのことば

二ヶ月バリで絵を描きました。たくさんのバリの友人を日本でも描き私の中でもっともっと描きたいと声がします。私のBALIは私においでおいでと、BALIを愛する人たちにもいつも両手をひろげてまっててくれます。

柚木 また里

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

□ Macintosh フォーマットの FD (Text Data)
□ Dos フォーマット（2DD-720KB / 2HD-1.44MB）の FD (Text Data)
□ Nifty-Serve の Mail
（宛先 ID/ MHC03202: 菅原 or GCB01162: 堀）

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

ヌガラの夜

なびぃ

「ヌガラ」と聞いてあなたは何を思い出しますか？大抵のバリマニアなら「ジェゴグ」を思い浮かべるでしょう。今回私は、渡バリ３回目にして初めて、ジェゴグをしかもヌガラで聴くことが出来ました。こりゃーすげー

８月１日午後４時、日本人15名を乗せたバス（というかベモというか）はウブドを出発した。ヌガラ初上陸に初めはウカレにウカレていた私だったが、余りのおしりの痛さと、踊りのレッスン疲れで、ヌガラに着いた時には「ううっ早く帰りたい」とちょっぴり思ってしまったのだった。そう、ヌガラまでの道のりは長かった…。

星空の下、お待ちかねの「スアールアグン」の演奏が始まった。カラカラコロコロと転がる様に音楽が近づいて来る。もっと「ズーン」という手応えを期待していた私にとってはちょっと拍子抜けした感もあったけど、これはこれで心地よい。きっと３時間もバスに揺られてやって来た私達をねぎらってくれたのかも知れない。新作の踊りや、復活したばかりの木のガムランの演奏の後、待ってました、「ジェゴグ対決」。わーい、私はずっとこれを待ってたんだよぉーん。これは２つのチームが音量のでかさを競うモノで（勝敗はどうやって決めるのか謎だけど）奏者も観客も盛り上がりまくるのをテレビで観て以来、どーしても観てみたかったのだ。演奏している間、どこで聴いてもよし、と言われたので皆、楽器の下にもぐったり、上に乗ったりしていたけど、私のお気に入りは２つのチームの間だった。それぞれの楽器の音の波が震動となって体を揺らし、体温はみるみる上昇し、クラクラしてくるのだ。顔を天に向けて星を見ていると、どんどん星へ近づく様で「わーい、このままどこへでも連れて行ってよー」って感じだ。途中盛り上がった「ジョゲブンブン」を挟んで２回戦へとなだれ込み…。今度は一番大きな楽器（一本の竹の太さが、ジャイアント馬場の太モモ位あると思われる）の上に乗っかってみた。そこから、腕を降り降ろし、汗だくでジェゴグをたたく奏者達をみながら私は、「この音は、ジェゴグという竹の楽器のみの音ではなく、このヌガラの大地の音であるのかも知れん。私は今"ヌガラのジワ"を感じているんだなぁ」と思った。そう思ったら「なんてすごいモノを観れたんだろう」という感激と、ジェゴグの震動で体中が"ぶるんぶるん"になってしまった。帰り際、使い終わったマレットをもらった。それは本当にシンプルな作りの木製のマレットだけど、「ヌガラのジワ」の一部を授かったみたいで、又しても「ぶるんぶるん」になった私なのでした。おわり。

ODALAN (Pura Dalam Padangtegal)

Pura Dalam Padangtegal で 25 年に一度の Odalan が行なわれました。ツーリストに小冊子が配られるほどの大きな Odalan でした。モンキー・フォレストの中にある Pura で『極楽通信・UBUD』Vol.3 の「UBUD よろず百科」の地図には Pura Dalam AGUNG(Desa Adat Padangtegal) と記してあります。この Pura Dalam Agung は欝蒼とした霊気ただよう森の中にあり、苔むした古びた佇まいが、いっそうバリ・ヒンドゥーの神秘性を増す瞑想的な Pura です。今回の Odalan のために数ヶ月間の修復工事がおこなわれ、Pura までの道もそして表示版も新しくなり、少しおニューで明るい Pura に変身しました。

●

Ceremony は 6 月 19 日から始まり 7 月 20 日までの一ヶ月間と予定が発表されていましたが、その後も 7 月末まで続いていたようです。プリアタン、ポンゴセカン、ロットゥンドウなどからも行列があり、UBUD 中に白装束の男達とクバヤ姿も美しい女性があふれていました。われわれツーリストがはかり知ることができない様々な儀礼が毎日のように Pura では行なわれていたことでしょう。アンクルンの演奏が一日中心地好い音色を Pura に響かせていました。そしてツーリストが日頃鑑賞することができる観光客向けにアレンジされたものとは違う本来の神々の歓迎のためのバリス、ルジャン、ペンデットが奉納されたようです。ペンデットは村のイブ・イブ（主婦連）が正装姿で踊り、元祖ペンデットが毎日のように演じられていました。地方によっては、このペンデットでトランスする人もあらわれると聞きます。Pura でしか踊られていなかったペンデットはいつごろから観光客歓迎の踊りになってしまったのでしょうか…？以下、竹ちゃん情報ですが、50 年代にスカルノ大統領が、重要な来賓を迎える際にしばしば大規模なペンデットを催していたそうです。これをバリのあるホテルが真似し、観光客の歓迎のためにペンデットを踊ったのが始まりではないか…?! ということです。

われわれツーリストが Pura に入ることが許された日は、7 月 10 日から 18 日までの 9 日間でした。毎晩のように舞踏やワヤン・クリが演じられ、夜な夜な繰り広げられる舞踏は深夜まで続き村人達を飽きさせません。ツーリストにとっても眠られない日が続き、嬉しい悲鳴の日々でありました。ついでに一言付け加えると、Ubud の人々があまり仕事をしないことに感謝したいものです。よくツーリストが Ubud の人が仕事をしないといって呆れていますが、かれらにもいろいろと都合と事情があるようです。彼らの儀式をいつまでも観光できることがわれわれツーリストにとっては幸せです。ツーリストのたいへんわがままな意見ですが、できることなら儀式を優先できる仕事をして欲しいものです。

モンキー・フォレストの静寂に浸透してしまうガムランの響き。下弦の月に照らされるヤシの木がいっそう古（いにしえ）を感じさせる。こんな光景がいつごろから繰り返されているのだろうか、そう考えただけでタイム・スリップしたかのような錯覚を覚え身震いがする。いつまでもこんな光景の見られる、素敵な島であって欲しいものです。

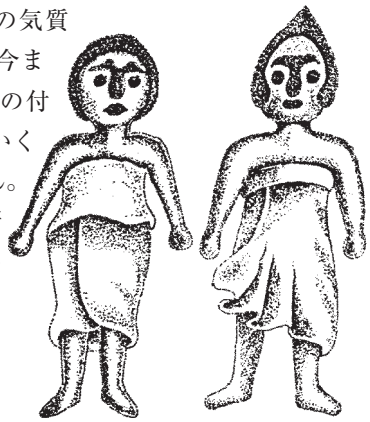
※小冊子希望の方は、先着 10 名様にお送り致します。

バリ人気質・1

あなたはぼ〜っとすることができますか？「UBUDに来ていつもぼ〜っとしています」とよく人は言います。しかし本当にぼ〜っとしているのでしょうか？どうしても我々はぼ〜っとしているようでもまだ何かしら考えているようです。たとえば景色を見ていてぼ〜っとしているようでいて景色の向こうのヤシの木が南国情緒だなと思ったり、飛んでいる凧がのどかでいいなと思ったりします。星空を見上げて天の川が綺麗だとかあの星が南十字星だとか思ってしまいます。それはそれでもちろんすばらしいことです。いやいやたいへんすばらしいことです。しかしやはりぼ〜っとしてはいません。そうしてみるとバリ人は本格的天才的にぼ〜っとしているようです。あなたは彼らがぼ〜っとしているところを見たことはありませんか？彼らがぼ〜っとするとは何も考えないことです。雨が降ってどぶの水が氾濫しています。それをぼ〜っと眺める、ただぼ〜っと、ただひたすらぼ〜っとである。何も考えないということは何も考えていないということで、頭の中はすっからかんのカラッポということです。それは脳味噌にとって最高のリラックスであり気持ちのよいことでもあります。ぼ〜っとすることの必殺技を持つバリ人だからこそ、トランスになってしまうのでしょうか。こんなバリ人の気質が気になって少し調べてみました。

人の気質には大きく分けて３つあると精神医学ではいっています。循環気質（そううつ気質・同調性性格ともいう）、分裂気質（分裂性気質・内閉性性格ともいう）、てんかん気質（粘着気質ともいう）の３つだそうです。これは病気ではありませんので分裂気質だからといって精神分裂症と勘違いしないでください。今までに読んだ数少ない文献の中に出てくるバリ人のキャラクターを総合してみると次のようになりました。繊細な神経、温和、忠実、親切、柔軟、迷信的、きっかけがあれば激しい気質を示す、怠け者という人もいるが他のどの人種と比べても勤勉さは劣らないなど、かなり誉め過ぎな気もしますが、これに体型の筋骨型をあてはめるとバリニーズはてんかん気質にピッタリです。バリ人に西洋医学があてはまるかどうかはかなり疑問ではありますが、ひとまずてんかん気質を要約してみました。

精神的のんびりで、刺激に対してもごくゆっくり反応する。他人に対して非常に親切である。しかしことがあると物凄く激情する。このように粘着性と爆発性という対立した気質が特徴である。物に愛着を持つ。整理・整頓を好み綺麗好き。粘り強く、きちょうめんで凝り性で熱中する。習慣・義理を重んじる。家族中心の生活を好み、多くの集団を渡り歩くことが少ない。職業もあまり転々としない。時にははなはだしく保守的である。極端に道徳的である。信念の人が多い。極端に経済的な人が多く、倹約家が多い。そしてこの気質を補償するためにギャンブルで浪費する人もでる。以上のように文献によるキャラクターとたいへん類似しているのにはびっくりしてしまいました。いくつかの疑問点、疑わしい点はありますがほとんどあてはまっているようでもあります。凝り性で粘り強さが、絵画や彫刻の緻密さに現われています。綺麗好きはたしかにそうなのだが見えない所の気配りが足らないようでもある。信念と習慣を重んじる精神がバリ・ヒンドゥーを残したのか。ギャンブルはまさに闘鶏に現われています。質素な衣類は倹約家で物に愛着がないからなのか。日頃温和な彼らも激情すると兄弟喧嘩でも刃物を振り回し殺傷事件にまで発展してしまうとも聞きます。　バリ人の気質を知ることで、今まで以上に彼らとの付き合いがうまくいくかもしれません。あなたも少し研究してみてはいかがですか。



Belajar Tari & Gamelan

◇シリーズ◇　私と舞踏とガムランと　5

たった６日の練習でしたが…

つくば山麓竹琴合掌男

去年、欧米人の２人組が竹の楽器を気持ち良さそうに叩いているのを見て、自分もやってみたいと思い、今年はこの楽器を習おうとウブドに来ました。影武者でそんな話をしていると、かんろく充分のバリニーズがニコニコお店に入ってきました。久しぶりに現われたその人こそ、ランティル氏でした。

ティンクリックを習いたいなら、この方こそと紹介してもらい軽い気持ちでお願いする事にしましたが、あとで私の妻に「グヌン・ジャティのランティルさんと云ったら本にも載っている程の大変な方」だと聞かされて、びっくりしました。翌日「こりゃえらい事になった」とおののきながらお宅に伺ってレッスンを受けましたが、先生はとてもやさしく手ほどきしてくださいました。ところが案の定、生徒の出来が悪くなかなか覚えられません。間違えるたびに悲しげに「ノー」と言いながら先生の背中がだんだん丸くなってきます。少しづつ慣れてきて間違えなくなると先生の背筋が伸びてきて声にも元気が戻ります。このようなことを幾度かくり返し何とか基本の５曲と共に帰途につくことができました。

ランティル先生のところの、それはすばらしい音色のティンクレックを２台ゆずって頂き帰国の前日に受け取りに行くと、それは見事に梱包されていました。なんと楽器を包んだシートの端を形に沿わせてぴったり丁寧に縫ってあったのです。感動でした。

それから、楽器を抱えて空港のチェックインカウンターに行くと「これは大きいので機内には持ち込めません」と言われ、妻が楽器を手放せないで涙ぐんでいると係員が「大丈夫、荷物の一番上にのせるから」と言って「こわれもの」のステッカーを裏表各々２枚づつ６枚も貼ってくれました。

わずかな日数でしたが多くの人の優しさが身にしみる旅となりました。—合掌—

Dewa Putu Beratha

photo: T. Kohara

デワ・ブラタ、27歳。UBUDのPengosekan村の、有名な音楽一家の長男である。彼の父は昔から名の知れたクンダン（バリの太鼓）奏者であり、デワを含め４人の兄弟がSemara RatihのPenabuh（演奏者）として参加している。デワ自身はクンダンをもっとも得意としているが、実はすべてのガムランの楽器をこなし、新しい演奏曲の作曲はもちろんのこと、踊りについてもくわしい実力派のミュージシャンなのだ。コカール（国立芸術高校）を経てSTSI（国立芸術大学）を首席で卒業、今はSemara Ratihの参加はもちろん、遠方の村々から乞われて教えに行ったりするスーパースターでもある。そして今回、６月中旬より２ヶ月間、アメリカのガムラングループ"Sekar Jaya"の指導の為、渡米した。帰国して間もない８月中旬、極楽通信のインタビューにこころよく彼は応じてくれた。

極楽通信（以下、極通）：まずアメリカへは今回どのようないきさつで？

Dewa：サンフランシスコにある"Sekar Jaya"というグループからSTSIを通じて個人的に依頼されたのです。もともとバークレー大学の所属だったこのグループのディレクターであるウェィン氏とは昔から知り合いだったので。

極通：アメリカ滞在中はどのようにして毎日を過ごしていたのですか？

Dewa：Sekar Jaya所有の練習用施設があり、"バンジャール"と名前がつけられているんだけどね、そこで毎週、ゴング・クビアールとアンクルンを２回ずつ教えていました。他に初心者のためのワークショップが毎週１回、そして自分の為に週３回英会話講座を受けて、あとの時間はのんびりできると思っていたら、毎日次から次へ個人レッスンの依頼があって、Baliが恋しくなる時間もないくらい、けっこう忙しかったよ。（笑）

極通："Sekar Jaya"は何年か前のBaliのアートフェスティバルにも参加していましたね。いかがでしたか、彼らの印象は？

Dewa：うん、歴史も長いし、とにかくバリのガムランが好きで好きでしょうがない人達ばかり集まってるからね。週に何回も、えーっと、バリで例えると…（しばらく考えて）うん、シンガラジャからデンパサールくらいの距離を車で通ってくる人がたくさんいたよ。今は若いメンバー、特に女性が多いみたい。みんな熱心に練習するので僕も教えがいがあった。

極通：アメリカ人にガムランの指導をするということで、何か苦労したことはありましたか？

Dewa：みんな少しづつインドネシア語の勉強をしてくれて、言葉の問題はそれほど感じなかった。音楽や踊りを教えるのに、言葉は大切じゃないよ。僕がむこうで教えたことは、技術的なことはもちろんだけれど、それ以上にバリの音楽を演（や）るにはJiwa（Spirit＝心とか精神とかいう意味のインドネシア語）が大切なんだ、…ということを伝えたかった。彼らはすでにすばらしい演奏力を持っているし、

Pentas(公演) の経験も何度もある実力のあるメンバーばかりだ。でもどうしてもあるフレーズが速く、正確に叩けなくてみんなそれに悩んでいてね、そこで僕は彼らにこう教えたんだ。たとえ西洋音楽の譜面のようにきっちり正確に叩けなくてもいい、時々まちがえたってそんなの tidak apa apa、いちばん大事なのは、そう、Jiwa なんだって。

極通：う～ん、Jiwa ですか。そのような抽象的なことを、彼らは理解してくれましたか？

Dewa：僕が教えに行って間もない頃は、みんな、頭の中が西洋音楽の楽譜のようになっていて、いかに正確に、きっちり演奏するか、ということしか考えていなかったように思う。でも僕がしつこいくらいに Jiwa、Jiwa って言うもんだから、みんな次第にとってもリラックスして演奏できるようになった。そして、その次は、"Senang"（好き、うれしい）という気持ちさ。ガムランが好き！バリの音楽を演れてうれしい！っていう気持ちでメンバー全員が一体になれれば、そこから Jiwa が生まれてくるんだ。僕の帰国直前に、むこうで発表会も兼ねて、大きなホールで Pentas をしたんだけどね、その、そうしても難しくて叩けなかったトルナ・ジャヤの一部のフレーズが、メンバー全員の Jiwa のノリで、すんなりうまく叩けてしまったんだ。本人達がいちばんびっくりしていたよ。「ああ、何も考えていなかったのに、手が自然にスラスラ動いたよ！」って感動してた。Jiwa を彼らに伝えられたってことだけでも、僕の教えた成果はあったんだと思う。

極通：今回の渡米も含め、Dewa さんは以前から何回か海外公演に参加していますね。どうですか、海外で公演したり教えたりすることは？

Dewa：今後もチャンスがあればどんどん行きたい。自分自身のいい経験にもなるし。

極通：余談ですが、今回のアメリカ行きは、初めての一人旅だったそうですね。ウワサではたいへんなハプニングがあったとか。

Dewa：いやぁ、ジャカルタを経由してロスアンゼルスまではガルーダだったんでよかったんだけど、ロスから飛行機を乗りまちがえてしまって、なんと6時間もかけてアトランタまで行ってしまったんだ。（爆笑）サンフランシスコの空港に僕を迎えに来てた人達が、僕の乗ってるはずの飛行機から僕がでてこなかった時は大騒ぎで、あわや、「Dewa、アメリカで行方不明か ?!」ってたいへんだったらしい。

極通：（ヒーヒー笑いながら）ありゃりゃ、それは Dewa さん、アトランタへのフライト中はさぞ心細かったことでしょう。Kasihan!

Dewa：ハハハ、おかげでもうどんなところにも一人で行けるよ。恐くないよ。（笑）

極通：最後に、今、日本人も含めてたくさんの外国人がバリのガムランや踊りを習っていますね。そのことについてどう思いますか？

Dewa：BerterimaKasih sekali.　とても感謝しています。僕たちバリ人の、文化や芸術を知ってくれて、愛してくれて、僕はとても嬉しい。誰であろうと、どこから来た人であろうと、Senang の気持ちはいっしょだから、Jiwa も Sama（同じ）。
今の僕の愛は 90%、バリの音楽で占められているんだ。だからなかなか彼女もつくれなくて。（笑）

アメリカから帰国して 1 ヶ月もたたないうちに、Dewa さんは、Semara Ratih のデンマーク公演で、再びあわただしく出発していった。このインタビューは、そんな忙しい中、彼が時間をさいて応じてくれたものだ。アメリカ滞在中は、昔からの友人も多くいて楽しく、毎日おいしい食事に誘われていたそうで、心身共に貫禄をつけて帰ってきたという感じだった。帰国後の最初の Semara Ratih の公演は、観ている私達までつられてしまうほどの満面の笑みをたたえて、ひときわ手を高く揚げてクンダンを叩いていた姿が印象的だった。
彼の言った「Jiwa」が、観ている私達にまで、じわじわと伝わってきた…と確かに思った。

photo: T. Kohara

TIRTA ARUM、～香り立つ水～

mamiga 松 TSUBOUCHI.

Sang Ayu は美に咲き切る花のように踊ります。
私は香り立つ水のように踊りたい。
すっと健やかに のびやかに 流れていって、すうっと呼吸をすると
"BARU" な香りがするような。
Sang Ayu のうしろをずーっと見ていて踊っていた。ほんとうに
幸せな時間。一緒になって おどっているだけで、私は Sang
Ayu の踊りに成っている。なにも考えない、ただただ、身体
中に踊りの気が流れゆくよう。Sang Ayu が帰ってゆくと
踊りも帰ってゆくかのように、始めは わたしの踊りがなか
った。――わたしの踊りが踊りたいなぁ。
Sang Ayu の踊りの気が私の血と交じわって、私の踊りの
気が生まれゆくような。そんなことを夢みて、
五年の月日がたっていた。毎年毎年の踊りからの"Hadiah"
をもらいながら、――始めの贈りものは、音楽を少し、
聞きかじる耳であった。そこから、踊りの楽しさ、喜びがわ
きあがってきて、私を踊りの流れに押し出した。
二度目の贈りものは、恋をしても、何をしても身体は、踊り
たいと思う つらさと悲しさであった。それでも踊りたい。

そんながんこな私に、私は少し涙が流れた。
そして三度目の贈りものは、指であった。
ヤシの木が風にゆられ、しなやかにゆれるヤシの葉。そのように指も踊る。そんな指、使いが、横にふよふよゆらぐ指の動きが贈りもので私の中にあった。
そうして、今年は四度目の贈りものがそっと届けられた所である。わかっていても わからなかった、腰の重心である。
腰をくいっと外へ投げ出して、胸をくっと前へそらす、Baliの人特有のかたち。おどりの一番美しくみせる基本のかたちが、ふっと身体が理解した。
私の踊りはまだまだ うっり気で やっと出たり、ぜんぜんないような。
Sang Ayuも「ひとりで、ひとりで」となかなか踊ってくれなくなってくる。——さびしい。——しかし私の血の中で、私の香り立つ水はじょじょに侵透してきているかのようにも思われる。

わたしのふれる、その大地から
踊りによって、清らかな香り立つものが
広がってゆくように。
神と呼ばれる存在の鼻腔(びこう)にその清らかしい香りが
とどくように、踊りつづけましょう。

——guru saya Sang Ayuにささぐ——

巨大彗星 (SL9)、木星に衝突！その結果はいかに…？

バリ天文教育センター主任講師：青木　満

本誌 Vol.3 でも紹介した、" シューメーカー・レビー第 9 彗星の木星への衝突 " 事件だが、その後の結果について当センターに問い合わせが殺到した。また " 伊藤の親分 " さんから「例の一件、ぜひとも次号でまとめてよ…」といわれれば、たとえ原稿を差し替えてでも書かないわけにはいかない。（影の声：「Tidak!」などと言おうものなら、あとが恐い…。）

そこで今回は、またもや予定を変更して " 天文学の歴史が始まって以来の大事件 " の、現時点で判明していること及び、筆者自身の観測結果とも併せて、簡単に解説してみよう。（詳細結果はまとまり次第、当センターより報告集を出版する予定です。乞うご期待を！）

1. 天文学者を震え上がらせた世紀の天体ショー

世紀の天体ショー、シューメーカー・レビー第 9 彗星（以降 SL9 と略す）の木星への衝突事件は、当初の予報より若干早まって、7 月 17 日未明（バリ時間）、分裂核 A の衝突を皮切りに幕開けされた。

一連の衝突事件の中心になる時間帯は、Vol.3 誌上にて筆者が示したものより 2 日程早まってしまったが、これは筆者が使用した SL9 の起動データが昨年末のものであり、当時はそれほど詳しい軌道要素が得られていなかったことと、その後の SL9 自体の再分裂や配列の変化、さまざまな要因による軌道要素の微変動がもとで、多少、事件の開始・終了日時に変動が生じてしまった。

また、衝突による影響に関しても、おおかたの天文学者の予想があまりにも控えめな見積で報道されていたために、逆に「筆者の見積は過大評価ではないか？」との質問もいくつか受けたほどある。しかしその点に関しては、ほぼ筆者の予想通りと言えるだろう。まずは順を追って説明しよう。

Vol.3 でも述べたように SL9 は、昨年 3 月にシューメーカー夫妻とレビー氏によって発見された時点ですでにバラバラの状態に分裂しており、ハワイのマウナケア山天文台などで撮影された写真からも、十数個に分裂した彗星の中心核が一列縦隊に並んだ不気味な姿で木星に迫っていることが判明していた。

さらには木星への衝突が確実となり、昨年 5 月 22 日に世界中の天文機関に発表された以降も次々と分裂を続け、最終的には大きなものだけでも 20 数個もの岩塊に分裂してしまったのである（分裂したそれぞれの核には、A から W までアルファベットで識別記号が付され、その中には、ひとつの核が再び分裂したものや、反対に途中で消失してしまったものもある）。これらが次々と木星面を“爆撃”するのだから、木星もたまったものではない。

隕石なり小惑星、彗星核が月面や他の惑星の衛星面、または地球型惑星に落下（衝突）するのであればいくらでも前例があるし証拠物件も示せるが、相手がガスの塊である木星あるいは木星惑星となると、1608 年にオランダの眼鏡技師リッペル・スハ

インによって望遠鏡が発明されてからでも、今日まで（実例がないとは証明できないが）目撃例がない。

いったいどのような事態が生じるものかは誰にもわからない。ましてや、どれくらいの大きさの彗星核が、どのような相対速度と経路で衝突し、彗星核の密度及び木星での衝突地点一帯の大気圧や組成などの正確なデータが確立しないことには、その結果を正確に予想しろという方がムリ。

なにより地球のように固い地面をもたない木星面では、どのくらい深くまで木星大気圏に突入するのかによって、大きくシナリオを書き替えなければならないからである。

ただひとつはっきり言えることは、このような衝突が起きることによって解放されるエネルギーは、大規模な核戦争又は全面核戦争並み、もしくはそれ以上の規模に達することである。しかし前述のように、その結果がどのような事態を招くのかは、当たってみなければわからないのである。もっとも、映画『2010年宇宙の旅』のように、SL9衝突がきっかけとなって、木星中心核での核融合が生じて、太陽系第2の太陽として木星が輝き出すというようなことだけにはなりえないことはハッキリしていた。

さて肝心の結果であるが、一連の衝突事件は、7月17日未明から22日夕刻まで断続的に起きた。この時期は日本よりもバリの方が天文学的及び気象的にもはるかに条件がよいために、筆者も連日連夜手ぐすねを引いて待ちわびていたのだが、バリではあいにくの気ままな天候に左右され、衝突の瞬間をこの目で直接目撃するチャンスには恵まれなかった。

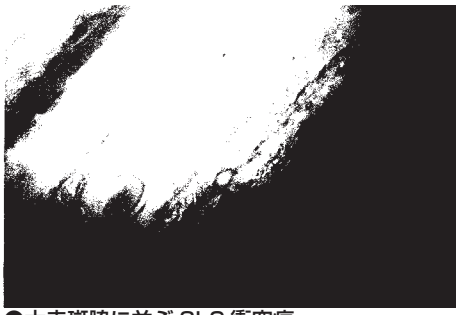
日本では一連の衝突のうちで夜間に衝突が起きるものは、たったの3回。観測チャンスに恵まれなかったにも関わらず、国立天文台・岡山天体物理観測所の口径188cmの日本最大の反射望遠鏡が、赤外線観測によって見事、衝突の瞬間を捕えることに成功した。世界規模では、NASAの諸機関をはじめ各国の天文台が総力をあげての一大観測網が張られ（日本の国立天文台もそのネットワークに参加）、さらには地球周回軌道を回る宇宙天文台“ハッブル宇宙望遠鏡”も駆り出され、すばらしい成果を納めることができた。打ち上げ当初陰口をたたかれた“ビンボケ望遠鏡”の汚名も、見事返上することに成功したと言えよう。また、現在木星に向かって暗黒の宇宙空間を孤独と戦いながら航行している木星周回探査機『ガリレオ』も、途中参加することになったが、最も有利な立地条件にいながら、観測データを地球に送信するアンテナが不調という、何とも皮肉な事態となってしまっているため、その成果がいかなるものかは、現時点では不明である。

衝突したSL9の各分裂核の大きさは筆者の予測通り数百mクラスから1km前後のモノが主で、1kmクラスのモノ一つの衝突エネルギーは、TNT火薬に換算して20万メガトン（広島型原爆の1千万倍ほど）にも相当し、これが地球上に落ちたのならば、たとえ落下地点が海上やら山奥などのように人のすんでいない地域であっても、空前絶後の惨状となることは火を見るよりも明らかである。

このように恐ろしいほどのエネルギーが一瞬に解放されるのだから、たとえ地べたにない木星面であってもケタはずれのキノコ雲が舞い上がり（最大高度1,600km）、その明るさも木星のすぐ外側を回るガリレオ衛星のうちの一つ、イオの30倍以上にも閃光が輝いた。残念ながらSL9の木星への突入軌道の関係でいずれの衝突も直接地球上からは見られない木星の裏側（木星での夜明けの寸前）での出来事となってしまったが、特殊な波長（赤外線、紫外線、メタンの波長域、電波など）を抽出することによって、可視光域（人間の目で見られる範囲の光）では捉えられないさまざまな現象をキャッチできた。

衝突の瞬間は、設備の整った観測施設でないと有効な観測は困難であったようだが、衝突後の木星面の様子は、一般アマチュアの使う小型天体望遠鏡でも、ある程度の経験のあるものならば容易に事件現場の惨状を眺めることができた。衝突地点には、真っ黒い大きな衝突痕がハッキリと残ってしまったからである。中には、同一地域に複数の核が衝突したために、複合式の複雑な衝突痕（地球よりも大きな跡）が残っているものも数ケ所で認められており、それらは有名な木星の超大型台風「大赤斑」にも匹敵するほどの規模である。

木星面での衝突位置は、木星面での南緯43～44°付近にほぼ固定され（SL9の各分裂核が、ほぼ同一軌道を運動していたため）、経度方向は木星の自



●大赤斑脇に並ぶSL9衝突痕

転と衝突時刻によって決まるため、木星面を望遠鏡で眺めると、衝突痕が木星の南半球の南極圏に近い中緯度地帯を点々と飛び石状に連なっている様子を見て取れる。このことから、、まったく別な問題の解答が得られるというおまけがついた。実は今まで月面や、木星のガリレオ衛星のうちで最も外側の軌道を回っているカリストという衛星面に、まったく成因不明なチェーン状の不思議なクレーターが発見されていたのだが、どうやらそれらはSL9のように、過去においてバラバラに分裂してしまった彗星核が次々に衝突したために生じたものであるようだ。木星面に残った衝突痕と、月面などの謎のクレーターとでは、見た目にはまったく異なる様相を示しているが、それらの成因や発生時の状況は、今回の事件とほぼ同じようなものだったのではないだろうか。（あくまで筆者の私見ではあるが…。）

ところで、なぜこのようなシロモノが残ってしまったのかだが、現時点で確定的なことは判明していない。いくつかの仮説がたてられているが、主なものは二つある。その一つは、「今までの光学観測では木星成層圏にあたるメタンやアンモニアなどによる上空の雲の様子を見ていたものが、衝突及びその爆発によって、木星大気圏に風穴があいてしまったことにより、より低層の様子が衝突痕として見えている」というもの。もう一つは、「SL9衝突によって粉々となった彗星核の構成物質と、木星上層大気を構成している各分子（有機化合物の可能性も指摘されている）とが混ざり合って新たな化合物を生成し、衝突地点上空で渦となって停滞している」というものである。

ただどちらの説もしくは、それ以外のものであっても、これら点々とした衝突痕は、今後かなりの期間（一説によると100年以上ともいわれている）、木星面に生々しい惨状の爪痕をとどめているものと思われる。ひょっとすると、「300年以上も続いている大赤斑は、過去において彗星核もしくは小惑星が木星面に大衝突したために生じたものでは…?!」という、新たな仮説が生まれるかも知れない。

あいにく、この『極楽通信 UBUD Vol.5』が発行される時期には「合」といって、木星が太陽の方向に位置しているため、たとえ一晩中がんばって張り込んでいても、木星観測ができない。しかし年明け頃には、明け方の東の空に空に木星の姿を捉えることができよう。ぜひとも“夜明かしの新年会”の祈りにでも、木星観測会を行いたいものである。その時、木星はいったいどんな姿を我々に見せてくれるのか、今から楽しみである。

今回のように木星への彗星衝突は、確率的にはおおまかに1,000年に1度といわれており、我が地球が同じような目に合う確率は、計算上でおよそ40万年に1回以下とされてはいる。しかし、そのXデーがいつやって来るのかは、まさに「神のみぞ知る」で40万年後かも知れないし、明日なのかも知れない。今から既に遅きに失したかも知れないが、とにかく今すぐにでも、各国ともに大至急、政府規模での対策を講じなければならない。愚にもつかない内紛や民族・宗教紛争などを演じているヒマなどないのである。これからはこの木星での惨事を参考にして、国連でも真剣な対策が検討されるそうだ。

幸か不孝か、この手の被害予想の研究は、冷戦時代の“核の冬”に対する天文学と核物理学による研究から、かなりのことが判明されつつある。いま真っ先に行わなければならないことは、彗星や“特異小惑星”と呼ばれる地球とのニアミスを起こす危険のある微小天体の世界規模でのパトロールの開始（一部の施設では既に実施されてはいる）と、くだらぬ国家間での意地の張り合いに貴重な予算と時間を割くことなく、この全人類への重大問題に最優先で十二分な予算を確保することが必要不可欠である。

また万々が一、地球と衝突が確実となった天体に対しては、現在ある全世界の核兵器をすべて利用してでも“危険天体”を破壊するなり、軌道を変えさせるなど、速やかな衝突回避するための緊急時の方策も用意しておかなければならない。

一昔前ならまさにSFの世界だけでのお話のようだが、我々の目の前で木星の惨事を目撃した以上は、これ以上のんびりとかまえているわけにはいかないのである。

ひょっとすると、このいつの日にかやって来るかも知れない“天からの判決文”が唯一、人類のくだらぬ争いを止めさせ一致団結させ得る、平和への使者となりうる存在なのかも知れない。しかし、もしそのような事態に陥らない限り、現在までの過ちに目を覚すことができないとするならば、我々人類は、後にも先にも“この地球上で最も愚かな生物”とのレッテルを張られても、一言もないだろう。

我々人類は、今こそ考えを根本的に改めて、新たな道を切り開かなければならないと共に、万物の霊長たる資格を問われているのではなかろうか？

2. 今年は土星の環の見納めを！

一時は「リング」と言えば土星の専売特許のように誰しもが考えていたが、1977年に別な目的の観測から偶然に天王星にも環が見つかったのを皮切りに、その後木星、そして海王星にも環が発見され、ついには「木星型惑星」と呼ばれているものはすべて環を持っていることが判明した。とは言っても、地球から小型望遠鏡で簡単に楽しめるものは、この土星のリングだけである。

しかし望遠鏡でながめさえすれば、写真などでよく見かける、お皿の上にリンゴがポツンとのっているような姿をいつでも見られると言うものではない。なぜなら、地球に対する環の傾きがおよそ30年の周期で変化しているためである。

このリング、直径はおよそ27万km（地球の約21倍）というとてつもなく大きなシロモノだが、さてその厚みはというと、なんと、たったの100m程しかないことが判明している。オリンピックの選手ならば、たった10秒たらずで駆け抜けてしまう距離だ。

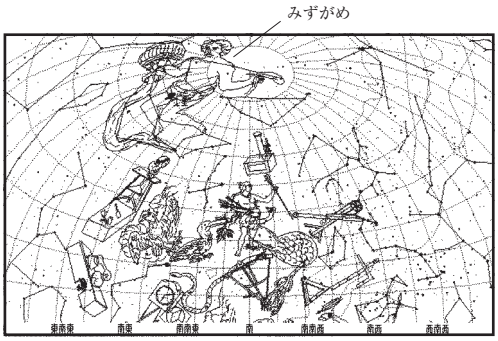
その比率（直径：厚さ）はというと、1m四方に広げたトレーシング・ペーパーよりもさらにケタ違いに薄いということになる。ただし注意してもらわなければならないことは、このリング、レコード版のように1枚板でできているのではなく、大小無数の氷の粒やカケラ（他の惑星のリング組成は、まったく異なる）で構成されていることである。

このように我々の日常感覚を越えるような薄さのリングを真横からながめたら、いったいどのように見えるのだろうか？

答えは、「まったく見えなくなる」ということだ。たとえ、世界で一番大きな望遠鏡（現在、日本の国立天文台ガ、ハワイのマウナケア山頂に口径8mの“すばる望遠鏡”を建設している）で挑んでも、まったくお手上げとなってしまう。

その昔、自作の口径3cm程の望遠鏡ではじめて土星をながめたガリレオ・ガリレイは、彼の望遠鏡の性能が十分ではなかったために環の存在を確認できず、「土星は3つの星からできている」と表現した。ところが運の悪いことに、翌年がちょうど環を真横からながめる年に当たったものだから、いつの間にやら左右の“お伴の星”が消えてしまって、さすがの天才ガリレオも、頭が混乱してしまったといういわく付きの現象なのである。

このように環のない土星なんて“○○にないコーヒー”のようなものかもしれないが、とにかく珍しい土星の姿を来年春から再来年の2月にかけて見られる（環の消失現象は、95年5月21日頃、同じく8月11日頃、96年2月11日頃の計3回起きる）。およそ13年ないし15年毎にしかめぐって来ない珍しいものだけに、これまた見逃せない現象だ。逆に土星の輪を眺めるには、今年から来年の春先までが勝負であろう。現在、土星はみずがめ座に位置しており、この時期観望には最適なため、ぜひこの機会に“か細い土星のリング”を眺めておいたらいかがだろう。みずがめ座は暗い星ばかりなため、その中に1等星として輝く土星は容易に探し出すことができるだろう。読者諸君の健闘を祈る！



3. あなたの疑問にお答えします！

この初夏から秋口にかけて、夕方西の空に日没間もなくギラギラと輝く謎の星。「あれはいったい何なのだ？」と、当センターにもたびたび問い合わせがありました。なかには、「フラフラよろめいているように見えるけど、UFOでは？」との質問も。

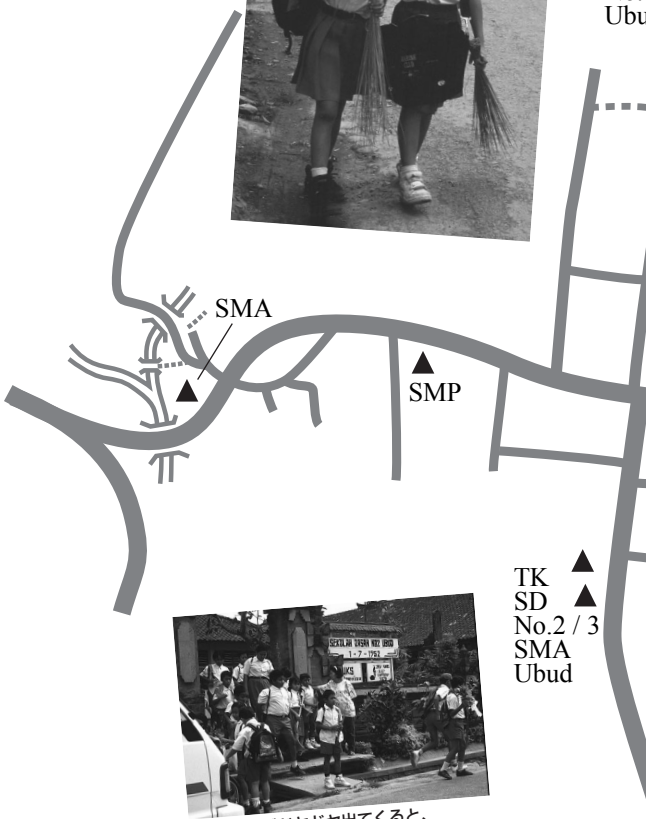
答えは“宵の明星”金星。実は前号にて金星について案内を書きたかったのだが、誌面の都合で割愛させていただいた次第。

この金星、最も明るくなったときには-4.6等級という、ずば抜けた明るさのため、しばしばUFO騒ぎを引き起こしている。今から20年以上も前にも、日本全国からたくさんの110番通報があり、手に余った警察から航空自衛隊に飛び火して、遂に時の司令官が緊急発進“スクランブル”を命じたのである。航空自衛隊ご自慢の戦闘機で謎の飛行物体を追いかけることしばし。しかし、敵もさるもの。まんまと西の地平線に逃げ込まれるという失点を犯してしまったという、ウソのような本当の話がある。

皆さんも、正体不明の天体（？）と遭遇したなら、まずは当センターまでお問い合わせください。

UBUD よろず百科

学校 / Sekolah



●小学生がドヤドヤ出てくると、
高校生がワヤワヤ登校してくる…。

今回はUBUDのSekolah（スコラー）、学校をご紹介しましょう。インドネシアの教育制度は日本と同じ6・3・3制です。独立後の政府は文盲率を減らすためにがんばっていて、1984年には小学校の義務教育制を実施、そして去年から中学校までが義務教育になりました。教育文化省が進めているプログラムがちょっとユニークで、現在35歳以下で、中学校を卒業していない人達にも村ごとに特別講座を開き、中学卒業と同じレベルまでお勉強しましょう…というものです。つい笑ってしまったのは、その特別講座に出席すると1グループでitik（あひる）3匹がごほうびにもらえるというなんともイキなとりはからいではありませんか。

そんなこんなで、政府の発表によると現在、7～44歳の文盲率は8.1%にまで下がっているそうです。さらに先進国に続け、といわんばかりに今年の8月から、国立の小学校から高校での就学時間が大幅に変更され、週休2日制になりました。そのかわり一日の授業時間が増え、今まで小・中学校が7:00～12:30だったのが今は7:30～3:00、高校はなんと7:30～4:00という生徒にはちょっと苦しい長い授業時間になったのです。そのため2部制で、今まで国立の授業が終わってから校舎を使っていた私立もしくはPGRIの高校生は、授業が夕方4:00、終わるのが9:00というほとんど夜間の授業になってしまい、今まで昼は学校、夜はレストランで仕事、というがんばり屋さんの生徒は、やむなく高校を中退してしまうなんていうケースも出てきてしまいました。しかし、当の本人達はケロリとして「勉強は一人でもできるさ、今はがんばって働きながら日本語を勉強した方がバグースだよ！」なんて言ってますが。インドネシアの将来を背負う生徒諸君、がんばれ!!と声をかけてあげたいですね。

最後に付録、笑える話をひとつ。

Baliでは若者達が、冗談で、中学校と高校をこんなふうに言い換えてます。

中学校＝SMP=Sekolah untuk Mencari Pacar
→恋人を見つけるための学校
高校＝SMA=Sekolah untuk Membuat Anak
→子供をつくるための学校

「う～ん、なるほど、そのとおり！」と、現地の事情に詳しいあなた、ついうなづいていませんか？

SMA

7
ud

SD
No.1
Petulu

TK

SD
No.5
Peliatan

SD
No.1
Ubud

SD
No.5
Ubud
SMA
PGRI

SD
No.4
Peliatan

SD
No.2
Peliatan

SD
No.1
Peliatan
SMP
PGRI

SD
No.3
Peliatan

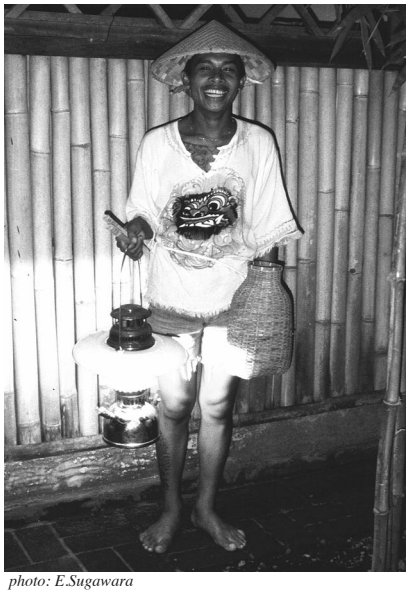
・ＴＫ＝Taman Kanak-Kanak（幼稚園）
・ＳＤ＝Sekolah Dasar（小学校）
・SMP＝Sekolah Menengah Pertama(中学校）
・SMA＝Sekolah Menengah Atas（高等学校）
・PGRI＝Persatuan Guru Republik
（インドネシア全国教師協会）

●高校生ともなると、いっちょまえにバイクで通学

●清掃セットのほうきを持って…。

さぁ！　今夜も Cari Lindung!!

UBUD の夜はひっそりとふけて、そろそろ丑満時にさしかかる頃、それも月のない真暗闇、どこからか田んぼのまん中にひとすじの光がボ〜ッと…。「ギョエ〜ッ、あれが噂のブラック・マジックか!?」と思いきや、なにやら人が腰にカゴをぶらさげてケロシンランプを片手にあぜ道を歩きまわっているではありませんか。そうです。これがあの「Cari Lindung」の姿なのです。チャリ・リンドゥン、Cari は"何かをさがす"とか"手にいれる"、Lindung は"うなぎ"という意味のインドネシア語です。Cari という単語は便利なので、女の子をさがす、つまりガールハントの時 Cari Cewek（チャリ・チェウェッ）なんていうのはしょっ中、耳にします。また、何かお金がかかる事、たとえば結婚式やお葬式、なにかビジネスを始めたい時などに、よく Cari Uang dulu（チャリ ウアン ドゥル）、まずお金をつくらなきゃね、なんて言ったりします。さて、今回の ENAK ENAK UBUD は、昔からバリの人々が自分達で Cari してきた、小さいけど貴重な栄養源をご紹介しましょう。



●正しいチャリ・リンドゥンスタイル。モデルは、チャリ・リンドゥンのプロ、コブリンです。

photo: E.Sugawara

日本でも田舎へ行くと、いなごやざざ虫（この不気味なモノの正体を誰かしりませんか？よく信州のおみやげ屋で売っているのですが、エナちゃんはこの商品名を見ただけで購買意欲が失われるのです。）の佃煮をみかけますが、きっと昔はそんな料理はよく食卓に出された貴重な蛋白源だったに違いありません。ここ UBUD でも、最近は豊富なお肉がパサールに毎朝並び、しゃれたミニ・スーパーでは冷凍のベーコンやソーセージなども手に入るようになりました。でも観光客の来るずっとずっと前は、自分達の家でしめたニワトリやブタが唯一のごちそうだったそうです。そんなわけで、バリの人々は、たくましく自分の手で、小さなごちそうを Cari してきたわけです。そしてそんな光景は、今の UBUD でも見ることができます、稲刈のおわった田んぼに再び水が入った頃、月のない夜を選んでまず Cari Lindung に出かけましょう。小雨なぞ降っていればなおよい条件となります。この Lindung、どじょうのような小さな田うなぎは（Vol.4 の Apa itu? のコーナー参照のこと）、カラリと香ばしく揚げて、クニッ（ターメリック）を混ぜたサンバルにからめてもイケるし、生のバワンメラ、にんにく、とうがらしとともに細かくきざんで塩を加えて混ぜるだけでごはんのおかずにぴったり。その上ビタミン豊富で栄養もたっぷりです。

そして Cari していると思いがけず手に入る副収入、カックル（たにし）とコドッ（かえる）。カックルはよく洗い、カラごと、バワンメラ、にんにく、

●捕まえた瞬間！

●手の平の上のカックル君

とうがらし、クニッ、その他香辛料を加えたスパイシーなスープでコトコト煮ます。サユール・グパン（きゅうりのような、大根のような不思議な野菜。あっさりしていて煮込みに向く）といっしょに煮ると相性バッチリです。貝のフタをポロッとはがし、思いきりズズ～っと吸うと、チュルっと身が口に飛び込んできます。コリコリした歯ざわりがおいしくて、ズズ～ッチュルッ、ズズ～ッチュルッ、とたいへん忙しい食事になります。エナちゃんは、カックルの身をとりだしてヤキトリ風のタレでサテにしたことがありますが、バリの人達に大好評でした。コドッは、食用とそうでない種類があるようで、エナちゃんは未だにその違いが分かりませんが、その道のプロはランプの薄暗い光の下でもひとめでわかってしまいます。まだピチピチしているコドッは、まず首をちょん切ってくるりと皮をはぎ、おなかの部分は捨ててしまいます。皮を剥がされたかえるのモモの筋肉の美しさはこれまた格別です。（なんのこっちゃ）そしてカラリと素揚げにして塩をパラっとふり、ガブリとくらいつくと、う～んビンタンビールの友です、これは。トリ肉と魚の中間のような味でくさみもなく、誰でもおいしくいただけるおいしさです。

田んぼでとれる小さなごちそうの他に、昔はよく子供達がつかまえてきたトンボの羽をむしってゴレン（油で調理すること）したり、雨期に異常発生するドゥダルというかげろうのような、羽ありのようなものも食べていたそうです。そして壮絶なのがコウモリのサテ。小さな洞穴に大きなアミをはって待ち構え、一網打尽にして肉をよくウスでつき、コテコテと竹の平たい串にくっつけて焼きます。「なんといっても精がつくでよ、ワッハッハ」とテガランタンのじいちゃんが言っていました。

たまにブケチョッというカタツムリも食べます。食通K氏に聞いた話では、ジャワで大量に捕獲してフランスに送り、そこで華麗なエスカルゴなるものに変身し、カンズメになって各国に輸出されているそうです。

いやはや、バリ庶民のたくましい食生活、私達も見習いたいものです。Cari Lindungのあと熱いKopi Baliなんぞ、UBUD滞在の最高の思い出になると思いませんか？
これぞ、まさしくENAK ENAK UBUDでっせ。ほな、また。Sampai jumpa!!　最近の大阪勢の影響で大阪弁がうつってしまったエナちゃんでした～。

●そして、本日の収穫

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK

COLUMN

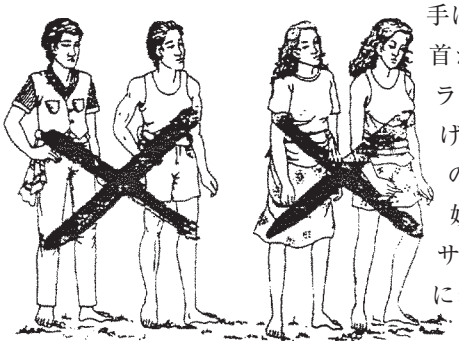
ツーリスト・エイリアン

小田蘭丸

何年前からかツーリスト・エイリアンと呼ばれる民族が海側の村クタに上陸して住み着いた。そして悪霊の住むという海で日ごと波乗り（サーフィン）に明け暮れ、白い肌もあらわに珊瑚礁の浜辺に寝そべり一日を過ごす。やはり海側の村サヌールにヤシの木より高いホテルを建て、たくさんのツーリスト・エイリアンを送り込んできた。そして不浄の方角と言われるバリ島南部の地に、都会と同じ快適な暮らしのできる高級リゾートタウンを建設し、ダイビング、ジェットスキー、パラセイリングなどのマリンスポーツを持ち込み、レジャーを楽しんだ。バリ島はツーリスト・エイリアンにとって最高のリゾート地になった。ツーリスト・エイリアンの上陸はバリの人々の大切な文化、習慣にとってなんの影響力のないことのように思えた。しかしその実体は近代化の波に侵されつつあり、文化・習慣を脅かすようになってきた。そしてAIDSとといわれる病原をも持ち込んだのである。

バリ島の歴史はモジャパイト王国の侵略、オランダの侵略、そしてツーリスト・エイリアンの侵略という侵略の歴史なのである。

ツーリスト・エイリアンはしだいに山側の村UBUDにも興味を持ち始め、バリの人々の見向きもしなかった渓谷を望む崖っ淵にホテルを建設した。手にビデオ、首からカメラをぶらさげ、ズボンの上から妙な風にサロンを腰に巻き、そんな姿でPURAに闖入してくる。リゾート地から来るツーリスト・エイリアンは男性は上半身裸。女性はボディラインも美しいフィットなウエアーそして太股もあらわな短ズボン姿でやって来る。最近までバリの人々も上半身は裸であったようで、あまりその点は気にならないようではある。しかし女性の太股あらわな短ズボン姿はわれわれ男性にとっては目の保養で楽しいものではあるが、バリ・ヒンドゥーの人々にとっては脚を見せるのは少し考えものであまり良くないことのようである。



バリの人々の感情の中には、ツーリスト・エイリアンはツーリスト・エイリアン専用の宿泊施設に泊まり、レストランと呼ばれるところで食事をし、ツーリスト・エイリアン価格で土産を買い、ツーリスト・エイリアン専用に催されるバリの芸能を鑑賞する…。そんなバリを充分に満喫して帰って欲しいと考えているようである。バリの人々とツーリスト・エイリアンは同じ空間を所有しながらも、まったくあいいいれない違った生活をしているのである。宿泊施設はほとんどツーリスト・エイリアンのためのものであり、バリの人々の食事はワルンと呼ばれる屋台か、ルママカンと言われる食堂でする。一部の人以外はほとんどレストランでは食事をしない。そして日用品はパサールや最近できたミニ・ショップで調達する。バリの芸能などもかれらは日頃、神に奉納するための神聖なものを鑑賞しているので、ツーリスト・エイリアンのための催し物的な芸能はまた違った意味で鑑賞しているのだろう。

近年バリの芸能を学ぶツーリスト・エイリアンが増えてきたようだが、バリの人々は教えることはしても決して会得出来ないだろうと考えているようだ。それは何故か？それはツーリスト・エイリアンだからか…？？

Kamu harus mengerti dong!

Karyawan P.T.Main-Main

インドネシア語をもっとよくしゃべるようになりたいなら、やっぱりインドネシア人と bercomunikasi するのが一番だ。友達、できれば *Pacar* から学ぶ、これがインドネシア語学習の王道だ。
それも、ウブド人よりもデンパサールなど町に住んでる（住んでいた）人がいい。ふつうのバリ人のインドネシア語は、イントネーションや発音がバリ語にひっぱられてなまっているからだ。たとえばバリ人のインドネシア語は、単語の最後の母音にアクセントがくるが、インドネシア語のたいていの単語は、最初の母音にアクセントがくる。sudáh ではなく súdah なのだ。

ぼくは、とくにジャカルタの人たちがしゃべる、リズミカルでシャキシャキしたインドネシア語が好きだ。といっても、Bahasa Brokem（スラング）が入っているから、日常会話は部分的にしか聞き取れないが。ウブドの人には失礼かもしれないが、ジャカルタやデンパサールの人たちがしゃべるインドネシア語は、聞いていて本当に心地好いし、うつくしい、というよりも *manis* な bahasa だと思う。

忘れられない一節がある。つきあいはじめる前に、友達経由で彼女からはじめて手紙をもらった。その中に *"Kamu harus mengerti dong! Perasaan wanita yang sangat halus ..."* と書かれてあった。日本語にすれば、「繊細な女心をちゃんと理解してね！」くらいだが、この音感の心地好さまでは訳せない。とにかくこの手紙の文を読んで、ぼくはインドネシア語って本当に **manis** ないい言葉だと思った。はじめてインドネシア語を心で理解したような気がした。

ところで…、あれからもう２年半たつ。ぼくは Perasaan wanita yang sangat halus を理解しているか？う～んまったく自信がない。インドネシア語は多少わかってきたが、インドネシア人の心を自分の心の中で感じ取り理解するのは難しい。とくに女心は…。ぼくのようにぬるま湯的な人間関係、恋愛関係に浸ってきた **COWOK JEPANG** にとっては、繊細で毅然とした心をもち、シャキシャキのインドネシア語をしゃべる彼女のような CEWEK INDONESIA は、つねに魅力的であり、また完全に理解できない「異文化」であり、コワ～い存在なのだ。

バリの舞踏 Mekepung

Enak Agung Ayu Okawari

Mekepung。ムクプンと呼ばれるこの踊りは、なかなか簡単には観られない。バリ島西部のジュンブラナ県ヌガラ地方で生まれたJegog（ジェゴグ）という超ウルトラ重低音の竹のガムランはご存知だろうか。Mekepungは、必ずJegogの演奏で踊られるもので、定期公演がなく、観るチャンスがめったにないのだ。

私が初めて観たのは6年前。奈良で開催されたシルクロード博のステージだった。それまでは、バリのガムランは知っていたし、レゴンダンスなんかもよくビデオで観ていた。しかし‼初めてこのJegogを聞き、Mekepungを観たとき今まで自分の知識の中にあったどんな種類のものとも違う、こんな不思議な音と踊りのコンビネーションに、新鮮な感動を覚えた。そして、いつまでも忘れられなかった。

Jegogの音、まさに大地も揺らぐ重低音は、とても竹でつくられた楽器とは信じられない程衝撃的だった。そしてその演奏で踊られるMekepung。このダンスの創作者は、ヌガラ出身のJegogの父と呼ばれるスウェントラ氏。日本公演でもお馴染みのSuar Agungのグループの親分でもある。彼が、デンパサールのASTI（国立芸術大学—現STSI）在学中、卒業制作として創ったのがこのMekepungだった。

踊りについて少し説明しよう。バリ人の生活に欠かせない米。その大切な米をつくる田んぼを、彼らは昔から牛を使って耕してきた。あのやさしい赤茶色のバリの牛。耕してはのんびりと休み、草地に座り込んで、しっぽでハエを追い払う。そしてまた耕す。ムチでそれをうちながす牛追いの人々。Mekepungは、そんなふうに太古の昔から営まれてきたバリの、牛と人々の様子を踊りにしたものなのだ。

Jegogは大地の音だと思う。Mekepungも大地の踊りだと思う。私達生き物すべてが、母なる大地から恵みを受けて生きている。理屈では説明できないけれど、JegogとMekepungは、私達の心のずっとずっと深いところを揺り動かす力があるようだ。

先日ヌガラでMekepungを観ながら、ふっと田んぼの女神デウィ・スリが喜んでる、大地も喜んでる…と感じた。

photo: E. Sugawara

photo: E. Sugawara

● Jepun

Bunga Jepun。ジュプンの花はバリの生活に欠かせない。ウパチャラの時の飾りやお供え物、お祈りの時。そしてこの愛らしい花は、人々の髪や耳に飾られて、manis なバリ人をますます美しく見せてしまう。

英語名：Frangipani、よくプルメリアとも呼ばれる。インドネシア語名は Kemboja、バリ名は、Jepun。

レゴンのかんむりは、ジュプンの花びらを手で半分に裂き、それをひとつひとつ針金に通していく。とても手間のかかる作業だ。

バリには実は2つのタイプの Jepun がある。ひとつは Jepun Bali と言われ、花びらが涙型をしていて、それぞれの花びらのふちがくるりとまくれているもの。花のつけねから、放射状に広がって咲く。色は、赤、白、黄、ピンク、もしくはその混合色で、いちばん小さいものは、花びらの長さが 12 ミリというものもある。こぶが多く、ねじれてのびた幹は、その特徴を生かして彫刻作品によく使われる。

もうひとつのタイプは、Jepun Jewa と呼ばれ、Jepun Bali より花が大きく平たい形をしている。色は白、中心部は黄色だ。

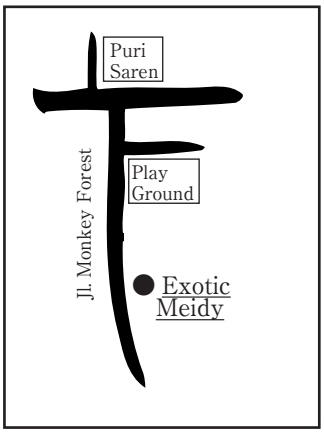
Jepug Baki、Jepug Jewa とともに、街の中、道路わき、家や学校の庭、寺院の広場などあらゆる所でお目にかかれるポピュラーな花だ。一年中花が咲いていて、とてもよい香りがする。
ヌサドゥアの南の端、Uluwatu 寺院の入口には、この Jepun の木が道にそって何本も並んでいる。まだ若くてきれいな花がたくさん散って落ちているのをひとつひとつひろっていくと 100 人分のレゴンのかんむりがつくれそうだ。

ハスの花の様に豪華でもなく、ハイビスカスのようにあでやかでもなく、ランの花のように気取ってもいないこのシンプルなシンプルな Jepun の花。だからこそ、バリ人にとてもよく似合うのかもしれない。この花をみかけたらさりげなく髪に飾ってみよう。バリ人のように。

Toko ◇ BEST 店

EXOTIC MEIDY

Jl.Monkey Forest は、ますますにぎやかになっているので、ついつい見逃してしまいそうな小さなブティック。ここのオーナーは、ブラジル出身の元モデルさんだそうで、なーるほどちょっとハデ気味でおしゃれな服が多い。実はこのお店、Kuta にもう５軒も出していて UBUD にはここ１軒。Kuta のブティックというとたいてい趣味の悪いギンギラの服…というイメージがあるが、なかなかここはいい感じですゾ。ちょっとしたパーティーなんかにも着ていけるセンスのいい服が多いし、特筆すべきは、なんとコーデュロイものまであって、UBUD の寒い７～８月の夜なんかにはこれがありがたいのだ。いかんせん、オーナーがブラジルの元ファッションモデルだけあって、とにかくサイズがデカイ。ワンピースなど日本人女性にはロングドレスになってしまう。…が、男物のコーデュロイのジャケット、パンツなんかは UBUD にはここしかない。日本でも着れるよ。ちなみに店の名前「MEIDY」は、オーナーのお名前だそうです。一度会いたいなぁ～、なんて、キミ、考えてるでしょ ?!

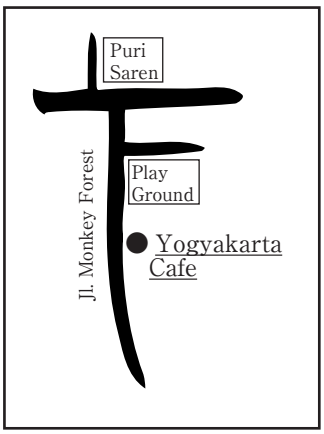


Monkey Forest Street Ubud, Bali, INDONESIA

Warung ◇ 味な店

YOGYAKARTA CAFE

インドネアシアどこへ行ってもあるはずの、おいしいチャイニーズ料理の店が２～３年前まで UBUD にはなかった。どこもなんとなくインドネシア化した味で、「中華はデンパサール」しかないと思っていたら…。あった、あった、その名も「ジョグジャカルタ・カフェ」。以前の小さいワルン風の店から一気におしゃれなレストランに変身。名物のアヤムバカール（トリのグリル）もおいしいが、おすすめなのはチキンステーキとナシゴレン。チキンステーキといっても中華風で、あっさり味の野菜あんかけが、骨なしのこんがりチキンにかかっている。う～ん、絶妙。そしてナシゴレンは、こっ、これぞ、私達の求めていた " チャーハン " なのだぁ！赤くない、辛くない、あのチャーハンなのだ。この店を知った人は、必ずしばらく通っている程、イケル。
あなたもどうぞ。お値段もそんなにムチャクチャ高くありません。



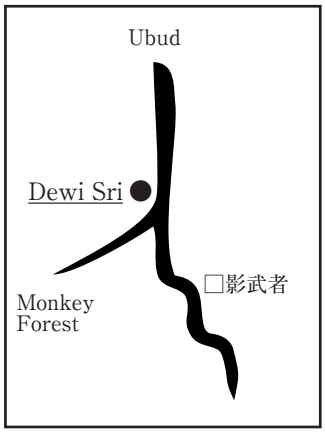
Monkey Forest Street Ubud, Bali, INDONESIA
Phone: 62(0361)96482

私の常宿

Pondok Manis

DEWI SRI

茶屋　峠



特筆すべきは、その便利さです。なにしろ隣りには"Dewi・Mas"と云う系列のコンビニがあって日用品はほとんど手に入るし、反対隣りにはツーリストオフィースがあるので、その気になればオプショナルツアーを申し込むこともすぐできるし、車やバイクを借りるのにもこの上なく便利。両替も有利なはずだし、おまけにお向かいがベベブンギルなので、雨が降っていようとも造作なくあのココナッツクリームパイが食べられるという具合。小さいけれどプールもあって、美しいお水がちゃぷちゃぷしているのを見ているだけで元気になれます。建物は少々古いけれど居心地はなかなかのもの。時たまちょっと大きめのヤモリのふんが降ってくるのがタマにキズだったりしたけれど、スタッフもみんな気持ちのよい人たちで、楽しく過ごせました。

Dewi Sri Bungalows
JL Hanoman No.69 Padang Tegal , Ubud,
Bali, INDONESIA　PO Box 23
PHONE : 62(0361)975300 Fax: 62(0361)975777

Pesan & Kesan

旅人一声

パダンテガルにて… S.U.

生まれて初めてバリを訪れ、クタもサヌールも通り過ぎ、何故か一路ウブドゥを目指し、ようやくホテルに腰を落ち着けたすぐ次の日のことだ。私は昼食を食べ終えた暇な午後、じりじりと照りつける太陽を横目にホテルのテラスで何をするでもなくボーッと机の上を眺めていた。花瓶に生けてある目にも鮮やかなハイビスカスの花の蜜がおそらく目当てなのだろう。小さな赤蟻がせっせと行ったり来たりしている。よくよく観察してみると、彼らは全く同じ道を通るので、行くものと帰るものがあちらこちらでしょっ中ぶつかっている。ぶつかってよけては又ぶつかり…、そんな事を繰り返しつつえんえんと同じ道を辿っている。そういえば彼らを朝も見掛けたことを思い出した。とすれば、朝からもうかれこれ９時間はぶっ通しで働き詰めというわけだ。こんな光景を見続けている内に、私の内でぴんと一本線に張っていた時間の糸がたるみ、たぐり寄せられ複雑に絡み合い交差し、いつからこの蟻を見ていたのかもさっぱり分からなくなってしまった。

これ なあ〜んだ？

Apa itu?

ヒント＝ワヤン・クリ（影絵芝居）に使われます。

名称は『**Jepala**』と言います。

解答＝ワヤン・クリは御存知ですか？ Vol.4 の「バダからの便り」にジャワ島では結婚式などで演じられていたワヤン・クリが今はなくなり残念だということが書かれてありました。バリ島ではまだまだ盛んで、必ずといってよいほどオダランではワヤン・クリが演じられます。結婚式、葬式などの儀礼にもよく演じられ鑑賞することができます。UBUD では毎週・水曜日と日曜日の夜に JL:Raya Ubud のあるオカカルティニで観光客向けに講演されています。

ダラン（人形遣い・語り手）は演じる前にかなり念入りな瞑想をします。そしてワヤン（人形）を一つ一つ慎重に点検し、今日の演目にあわせ使う順に並べていきます。その時は『Jepala』を左手に持ちます。並び終えいよいよ始まりという時には足用の『Jepala』を右足の指にはさみ、箱を叩き、拍子をとります。答えはワヤン・クリで使われる拍子木・Japala でした。

Peliharalah Lingkungan UBUD

UBUD の環境を考える

UBUD に滞在した日本人ツーリストに「環境問題を考える」という質問をしたところ、お題目が立派過ぎたのか「それは行政を動かさなくては、どうにもならないぞ」そして「あまりゴミのことをツーリストに強制すると、ツーリストが観光に来なくなってしまうので、政府に目をつけられるぞ」とアドバイスされました。しかし悲しいかな我々には、行政を動かす能力はありません。はたまたゴミの問題、環境の問題を考えるというだけで、ツーリストがバリを見放してしまうものだろうか。そんなことはないと信じます。そしてどんな小さなことでもしないよりはしたほうがよっぽど良いと考えます。つかいふるされ退化した言葉だと思いますが「草の根運動」の精神です。

こんな少女がいました。UBUD に来ると必ず小さな竹のかごを買い、宝物でも入っているのかのようにかごを小脇にかかえ Jalan Jalan しています。そして買い物をした時にはビニール袋をもらわず、その竹のかごに入れていきます。日本の昔もお母さんは買い物かごを持って買い物にいったものです。それを覗くのが子供達の楽しみの一つでもありました。UBUD ではこの買い物かごがよく似合います。男性諸君は籐で編んだかごでも背負えば、お洒落センス 100% 請け合いです。

今回のキャンペーン・キャッチ・フレーズ
『買い物かごを持とう！』

その他のニュース

■レストラン百屋（ももや）OPEN

1994年7月29日、「ももたろうバリ日記」でお馴染みのジェロ・チャンドラワティさんとちょっと前髪が薄くなって心配顔のチョ・アグンさん夫妻の店がJL.Suweta No.18の実家にOPENしました。店はこじんまりとして落ち着いた雰囲気の2階建て。若夫婦のこまやかな気遣いと温かい持てなしが有り難いです。店名の由来は、親馬鹿ちゃんりんで愛息の名前「百太朗（ももたろう）君」からと聞きました。料理はバリ料理とイブの得意な日本料理。バリ料理は他の店にない家庭の味を出してくれます。バリを満喫したいツーリストにとっては見逃せない店です。是非皆さん応援してあげてください。そんなこんなで大忙しいジェロは原稿締め切りをすっかり忘れているようです。「ももたろうバリ日記」のファンの方々、ジェロの忙しさが解禁になるまでもうしばらくお待ちください。

■プリアタンで深夜火事

1994年8月28日深夜1:00、クルクルを叩く音が激しく闇夜に鳴り響くのを聞き、外へ出てみるとプリアタンの方角から夕焼けのような橙色の火の手が上がっており、野次馬根性ででかけてみる。プリアタンの通りをバケツを持った大勢の男達が火の手の方へゆっくりと出かけていく。火の元はアグン・ライ・ギャラリーの裏手数十メートルの方角である。さすがに火事場までは図々しく行くことができなかったが、部屋に戻ったころには火もおさまり煙も消えかかっていた。バケツリレーの成果なのか、あまり大火にならなかったようである。翌日バンバン（影武者従業員）から情報を聞いてみると、失火原因は漏電。縫製工場が燃え、たくさんの布とミシン3台そしてテレビが1台焼失したそうだ。バリではデンパサールに数台の消防車がある以外他の地域にはないため、火事になれば燃え尽きるのを待つしか無いようだ。今まではそれでよかったし、また火事も少なかったようである。電気が普及し、失火原因が漏電という新しい事態が浮上し、近年UBUDも電化製品が普及し住宅も密集してきたので火事は心配の種である。火事場跡は闘鶏、ムチャルの儀礼をしたそうだ。これがなんとバリらしい。

■ Upacara Pitra Yadnya Kolektip（合同葬儀）

1994 年 8 月 31 日、Br:Tebeesaya と Br:Tegas Kawan Yang Loni で 3 年に 1 度の合同葬儀の火葬（ngaben/plebon）が行なわれました。Tebesaya で 7 体、Tegas で 15 体という大規模な火葬にツーリストは圧倒されていたようです。火葬には全財産を使い果たしてしまうほどの大金がかかり、なかなか一般の家庭ではすぐにすることができず、今までは数年、十数年、なかには数十年も仮埋葬したままの遺体があったそうです。それを思わしくないとするインドネシア政府によって近年経費の節約のできる合同葬儀が定められたのだそうです。

■ジェゴグツアーついに実現

1994 年 8 月 1 日、ヌガラのジェゴググループ「SUAR AGUNG」の演奏を聴くには、ヌガラの地でヌガラの空気に包まれての体感が最高と、こだわり多きバリ音楽大好き人間 15 名はベモ・バスをチャーターして一路ヌガラへ出発。SUAR AGUNG のリーダー、スウェントラさんと和子さん夫妻の笑顔に迎えられ、8 時開演。夫妻の好意により多彩なプログラムを観賞することができました。木の鍵盤のガムランの演奏—これはすたれたものを復興させたそうです。スウェントラさんが STSI の卒業制作として創られた MEKEPUN（牛追いの踊り）と 8 月の日本公演のための新作「鶴の舞」。二組のジェゴグ・グループが音と技術を競うムバランは延々 2 時間も続き、地球の地鳴りのような巨竹ガムランの超重低音の響きに参加者全員が酔いしれていました。フィナーレはジョゲ・ブンブンで全員が楽しい冷汗をかきました。帰路は深夜 12 時をまわって出発。興奮冷めやらぬ参加者の声がいつまでもベモ・バスの中で続いていました。

■ Petulu の白鷺が減った不思議？

白鷺の村として名高い Petulu を通過すると通貨料を徴収されるようになった。今まで白鷺を見るだけで通り過ぎてしまうツーリストから少しでもお金を落としてもらうのが目的である。自然に住み着いている白鷺を見るだけでお金を取るとはなにごとだと怒らないでください。村は白鷺の糞の処理などで大変苦労しているのですから。その白鷺が減ったのではないかという声を聞き、思い出しました。1994 年 4 月、Br:Pagutan Kelod Batubalan の Pr:Babian でのオダランでチャロナラン劇が演じられ、披露されたバロンの全身の毛が白鷺の羽根だと聞きました。全身の毛の修復のために 1000 羽の白鷺から羽根を集めたそうです。その時に Putulu からもつれていかれたのではないでしょうか。白鷺さんには可哀相ですが白鷺の羽根のバロンは大変優美でした。

蛇足＝白鷺はバリ語で Kokokan（ココカン）とい

い、いい響きの言葉です。アグン・ライさんの経営する Kokokan Club は白鷺クラブという意味になり、日本語に直すと少し響きが悪くなりますね。Petulu の入り口にも白鷺の絵とこの Kokokan という文字の看板が出ていますので是非足をのばしてみてください。

■ Ubud の印刷屋

皆さんも既にお気づきだと思いますが、Vol.4 の印刷がちょっと汚かったですね。文字はかすれてるし、写真はつぶれちゃったし、さぞ読みにくかったことと思います。ごめんなさい。

実は、これには訳がありまして、この夏 Ubud にもオフセット印刷屋さんがオープンして、今までデンパサールの印刷屋さんまで通っていた編集スタッフ達は、大喜び。早速、Vol.4 の印刷を頼みに行ったのでした。出てきたスタッフはジャカルタ仕込み風のインドネシア語をビジネスライクに操り、「びさ～」と自信満々。部屋の片隅には、コンピュータやらスキャナーがデデンと置かれ、レイアウトソフト (Window's 版の PageMaker 4.0 だぞ）が走っているぢゃあ～りませんか。操っているバリニーズの手元はちょっと怪しげだけど、設備万端、ハイテク～！ってな感じです。「いいぢゃんいいぢゃん、それぢゃヨロシク」と版下を渡してきました。

そして、待つこと 1 週間。約束の納期が過ぎても音沙汰なし。心配になって訪ねてみると、どうも出来ている形跡なし。ボスが居ないからわからない。ぢゃボスに電話してくれるようにと言ったところでかかってこない。う～む～、やっぱり Ubud だ。なんやかんやでついに、3 週間。

そして、やっとこ出来上がってきた Vol.4 は、ご覧の通り…。編集スタッフ一同、ズッコ～ンと落ち込みまくり、次号からはまたデンパサール通いする決意を新たにしたのでありました。

【年間購読申込み方法】
エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末の BALI 本部です。料金は、3,000 円。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

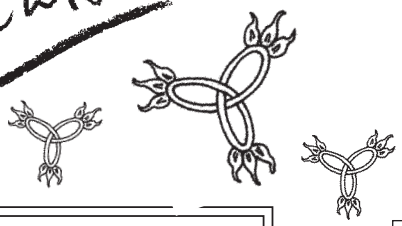
STUDIO

あなたもバリの芸能・芸術にチャレンジ！

Name	Point	Adoress / Tel	
Semara Ratih	あのスマラ･ラティのリーダー、アノムそしてアユがコーチしてくれる。宿泊施設有。	Jl. Kajeng 25, Ubud Tel. 96277	ダンス、ミュージック
Puri Agung	プリアタンの王宮でも習えるのだ！宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Mandara	御存知､ティルタ･サリのご本家。宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Gunung Merta	日本語のできるバパ･イダ･バグース氏が相談にものってくれる。宿泊設備有。	Andon Tel. 975463	ダンス、ミュージック
Nata Raja	STSI（芸術大学）出身のワヤン氏は、マルチ･ティーチャー。	Jl. Sugriwa, No.20, Ubud	ダンス、ミュージック
Wayan Karta	カルタ氏本人はガイドだが、家族はダンサー･ミュージシャンが粒ぞろい！	Jl. Suweta, No.16, Ubud Tel.975730	ダンス、ミュージック
Sanggar Centil Cili	STSI 出身のメンバーを中心に、スタッフもやる気満々。気軽に習えます。	Pengosekan, Ubud	ダンス、ワヤン･クリッ
Dewa Berata	あのスマラ･ラティのクンダン（名物男！）奏者。STSI 出身。お父さんから、4 人の兄弟みんな音楽一家。	Pengosekan, Ubud	ミュージック
Gusti Sana	SANA 氏独特の、カエル百態、ちょっとエッチなタッチ。とてもやさしい先生。	Pengosekan, Ubud	ペインティング
Budiana	D. ボウィーも持っている、ブディアナ先生の摩訶不思議な、エロティックなスゴイ絵、あなたも描けます。	Jl. Hanoman	ペインティング
Lantir	テガスのグヌン・ジャティの巨匠、パパ.ランティールが秘伝の技を伝えます。	Br.Tegas Kanginan No.53	ミュージック
Rino	一度観たら忘れられない、あの Tegas のケチャのワイルドマン、リノさんが教えてくれます。トペン、バリス、Bagus です。	Br.Tegas Kanginan No.50	ダンス

でんごんばん

Pengumumaan



★さやかちゃんへ

ジョゲブンブンのちゃるの写真、送ってくれるって言ってたから、ちゃる待ってるのにぃ～。どしたの？

ちゃる

●お詫び●

今号、「ももたろうバリ日記」「Hidup Baru」は、作者の都合によりお休みします。ごめんなさい。

★訪ねサンダル

タバナンからギリマヌク方面へ 12.74km 行った辺りの、幹線道路脇水路で買ったばかりのビーチサンダルをなくしてしまいました。黒にレインボー鼻緒が目印の "Daimatsu" 製です。もし見つけた方がいらっしゃいましたら、影武者まで届けてください。あの履き心地が忘れられません。

匿名希望

Terima Kasih

発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 ／ Yumi S. ／えりり／堀　祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：小原孝博 ／ 堀　祐一 ／ 菅原恵利子

カバーイラスト：柚木美里

ロゴデザイン：Hiroko S.

インドネシア語監修：Rianto S.

極楽通信「UBUD」Vol. 5

1994 年 10 月 25 日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16,Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1994　影の出版会　禁無断掲載

影の出版会事務局

● BALI 本部　Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134

●日本連絡先　〒 106　東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内 , tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803